

《一滴》「実力ある指導者の輩出を」、IDE、現代の高等教育 532、大学院の危機、2011年7月号、IDE 大学協会 2011年7月1日刊を読む

実力ある指導者の輩出を

1. 3月11日、巨大地震が東日本を襲った。それは、日本の歴史上で最大規模のものとされ、被害は広範に及んでいる。そして、人類にとって経験のない、自然災害に誘発された原子力事故が発生した。その被害は、放射線による直接のものこそ顕著ではないが、すでに国土の一部を無人化に追い込み、産物に対する風評被害を含め、国際的に日本という国への信頼を失墜させ、止まるところを知らない。そして、それらすべてが、想定外という前置きのもとに語られている。
2. しかし、そうだろうか。あれほどの津波に襲われても住民のほとんどすべてが生き延びた集落がある。それは彼らには今回の事態が想定されていたことを意味する。原発事故にいたっては、想定外のことなど何もない。臨海設置で高度をわずか10mとし、非常用電源を本体に隣接させて設置したのは基本計画に誤りであり、集められた多数の電源車が何の役割も果たせなかったのは、災害演習という基本を怠った結果である。そして、炉内の使用済み燃料は、核燃料サイクルの確立のないままに発電のみを拡大してきた、事なかれ主義政策の象徴でしかない。
3. 災害に耐えて、規律をもって行動する被災民は、国際的な賞賛をさえ浴びた。人命の救助と捜索、瓦礫の撤去からインフラ復旧に取り組む自衛隊、警察、消防、そしてボランティア達の黙々たる姿には頭が下がる。原発事故に立ち向かう現場作業の人たちの真摯な様には、心を打たれる。それに比して、想定外を口にするか、口にしないまでもそうだと態度に丸出しにしている政治家、行政官、企業幹部、学者たちのなんとたよりないことか。そして、後者の人間達を主として養成してきたのが大学ということになる。
4. それは、伊藤隆編『続・巣鴨日記 - 笹川良一と東京裁判』(中央公論社 2007年)の一節を想起させる。「獄中の笹川はここで多くを学び、それは……資産となった。高等小学校しか出ておらず、自己の努力で代議士にまで申し上がって来た彼の目には、他のA級戦犯容疑者、肩書を失って裸になった戦争指導者たち——その大半は軍人を含めて官僚の階梯を駆け登ってきた秀才であった——の姿は実に情けないものであり、その弱さを理解することが出来た。
5. 今再び国としての存亡の危機に直面して、大学には、今度こそ試験に勝ち抜き肩書を得ただけでない、現実を動かし解決できる実力ある指導者の、輩出元になることが求められているのである。

[コメント]

「現実を動かし解決できる指導者の輩出元になることが求められている」のは、大学だけではない。学習塾を含むすべての教育機関であると考え。では、どうしたらよいか。真摯に考えたい。

- 2011年7月16日 林 明夫記 -